

石川啄木の新しい偉業

近藤 典彦

ちょうど100年前の1910年8月29日、官報号外の形で韓国併合詔書が公布された。

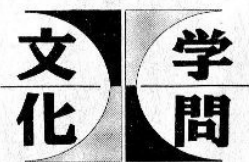
石川啄木は東京朝日新聞に勤めていたので、29日のうちに翌日の新聞を手にして家に帰った。そして「時代閉塞の現状」を書くために新しい原稿用紙に向かった。

東京朝日新聞に寄稿したが、強権に真っ向から闘いを挑むこの評論の掲載は不可能と判断された。不可を知らされたのはおそらく9月9日。この夜啄木に歌があふれ出た。

まず赤いインクで7首、つぎに黒いインクで17首、そのつぎは再び赤インクで9首、最後にまた黒インクで6首、合計39首を作った。

黒インクで作った17首の歌群のテーマこそ「韓国併合と時代閉塞の現状」であった。

この歌群の第一首目が100年後の今、強い光を浴



地図の上朝鮮国に黒々と……

韓国併合批判の歌 5首も



石川啄木

びている名歌である。

地図の上朝鮮国に黒々と墨をぬりつつ秋風を聞

く

韓国併合をメディアを通じて批判した日本人は啄木を除くとたった一人もいなかった。日本人は併合を狂喜して祝った。ともあれ、この1首のあることはすでに知られている。

しかし、このたび韓国併合批判の歌が別に4首もあることが分かった。

新しく見つかった4首のうち3首は「黒インクで作った17首の歌群」の中にある。

明治四十三年の秋わが心ごと真面目になりて悲しも

〔解釈〕明治43年（1910年）の秋は韓国併合・時代閉塞の現状という二重の悲劇的状况の中で迎えた。わたしの心はとりわけ

真剣に状況と相對しているので、今年の秋は悲しいことだ。

何となく顔が卑しき邦人の首府の天空を秋の風吹く

〔解釈〕植民地地獄に落とされた韓国千数百万人の悲嘆悲痛を思う気持ちなど微塵もない、ただ奪いまくり掠めまくることしか考えていないさもし顔の邦人日本人、その邦人の首府（元首）天皇を朝鮮半島でも吹いているであろう秋風が吹く。

秋風の来るごとくに来りたる我の疑惑は人ししらなく

〔解釈〕これまで自分は天皇を尊崇してきたが、韓国併合と時代閉塞の現状をもたらした強権の頂点にあるのは、山県有朋や桂太郎ではなくてこの人ではない

のか。この秋わたしの中に吹き入ったこんな疑惑を人は知らない。

以上3首のうち1首目、2首目と「地図の上」の歌が短歌雑誌『創作』9月号に載った。

知性とヒューマニズムと勇氣に満ちた青年のたった独りの闘いだっただ。

2首目「何となく」の歌は次のように作り直して、『一握の砂』に潜ませた。

邦人の顔たへがたく卑しげに
目こらうる日なり
家にこもらむ

以上4首の新訳は、大逆事件・韓国併合・「時代閉塞の現状」執筆・『一握の砂』刊行、この四つの100年でもある今年になって発見された、石川啄木の新しい偉業である。

(Marian・GSMJ)
前国際啄木学会会長

朝の風

天皇暗殺を謀ってうち上げ、幸徳ら12名を死刑台にた1910年の「事件」から、今年00年。この年、大谷派（東本願寺）ら刊行された『高明の事績に学ぶ資料集』に注目した「大逆事件」に仏教界から多くの者が出た。なかで山愚童（曹洞宗）